万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒213-8507　神奈川県川崎市高津区溝口 3-8-3
帝京大学医学部附属 溝口病院外科
TEL：044-844-3333（内線3223）FAX：044-844-3222
発行者：山　川　達　郎
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫（帝京大学溝口病院外科）
E-mail：nmurata@med.teikyo-u.ac.jp
印刷：株式会社 dig　TEL:03-3551-3060
年２回発行1995年4月創刊

ご挨拶

慶應義塾大学医学部
医学部長・外科教授
President ISS/SIC
Congress President ISW2007
北島　政樹

第42回万国外科学会（ISW2007）がカナダのモントリオールで開催されるまでもう1年をきりました。

昨年の南アフリカ連邦・ダーバンでのISW2005終了と同時にISW会長として何が出来るかを熟慮してまいりました。次の3点を2年間で着手しようと考え、実行してまいりました。

まず第一に、健全な財政の元にISW2007を運営すること、第二に魅力あるプログラムを作成すること、第三に若手外科医のトレーニングを構築することであります。

まず第一の課題は、スイスの本部及びカナダのLOCとE-mailで常に連絡を取りながらスポンサーシップの獲得に会長として努力してまいりました。本来LOCが努力するのか会長がするのか曖昧なところがあり、それならと個人の人脈をフルに活用し、Principal SponsorとしてEthicon Endo - Sugery、a Johnson - Johnson Company及びTyco Healthcareか、またassociated sponsorとしてOlympus及びToyotaにご支援を頂くことができました。これ以外に4－5のmajor companyが更に支援していただくことになっております。又第二のプログラムに関しては3月のダボスの理事会時にプログラム委員会を開催し、案を作成してこれを基に各参加学会と何回かやり取りを行い、9月～10月にはPreliminary Program & Call for Abstractsが会員の皆様のお手元に届く予定です。

第三の若手外科医の教育ですが、3月のダボスでも全ヨーロッパから250人の若手外科医が集まり、外科手術手技のトレーニングコースを受けておりました。さすが、ヨーロッパと思ったのはコースは午前中、午後スキーと余裕のプログラムを組んでおりました。もし日本で開催する場合には日本外科学会、日本消化器外科学会および日本内視鏡外科学会のご協力が不可欠であります。本件に関しては、計画、立案を進めているところであります。

ISW2007まで残された1年間でありますがカナダLOC会長のDr. Gilles D. Beauchamp, およびDr. Ren'e Lafreniereと密な連携をとりながら、又スイス本部のDr. Felix HorderやMr. Victor Bercheと協力し、出月名誉会員、比企元理事及び日本支部会会員の皆様方のご支援を得て、山川副会長共々ISW2007の成功に向けて邁進しようと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

International Surgical Week (ISW) 2007、2009、2011とJapan Chapter, ISS/SICの役割

ISS/SIC Japan Chapter,
National Delegate
帝京大学医学部名誉教授・常勤客員教授
山川　達郎

1997年ISS/SICの事務局長に、また2000年からはNational Delegateにご指名いただいたから、月日の経つのは早いもので、10年が過ぎ去りました。その中で2007年8月26－30日、カナダのMontrealにおいてISS/SICの現Presidentの慶応義塾大学　北島政樹教授を会長として開催されるISW 2007と横浜で開催されるISW 2011が決定したことは、日本支部会にとって、また私にとっても、大変な意義を持つ大きな出来事でありました。

第1回のISWが1905年Brusselsで開催されてから、100有余年が経過したわけですが、これまで、アジア人でPresidentを勤められたのは、Hamburgで開催されたISW1983の故Professor Tan Sri G. B. Ong (Hong Kong)とLisbonで開催されたISW 1995の東京大学名誉教授、出月康夫先生にすぎず、北島政樹教授のこの度のPresidentご就任は3人目の快挙であります。またアジアで開催されたISWは、英国のSir Thomas Holmes-SellorsをPresident、日本医科大学名誉教授　故斎藤　淏先生をCo-President LOC（Local Organizing Committee）として京都で開催されたISW1977とHong Kongで開催されたISW1993に次ぐ3回目の開催で、ISS/SIC支部としては大変誇りに感じると同時に、重く受けとめなければならない事実であると感じている次第です。私はこの日本で開催されたISW1977に故斎藤　淏先生のご推薦をいただきactive memberにしていただきましたので、会員歴30年となりますが、ISW2011が日本に決まったことに感激を覚えます。

ここまで、ISS/SICの中で、Japan Chapterの力を評価していただけるようになったのは、ISS/SICのFormer president出月康夫教授、Former Executive Councilor比企能樹教授とISS/SICのPresident北島政樹教授のLeadershipと一連のJapan Chapterの活動にご協力くださった会員諸兄の活動の賜物であり、心からの感謝の意を表する次第です。

北島政樹教授によりますと、ISW2011については、すでにISS/.SICの本部で色々と準備をはじめたとのことでありますが、これだけの伝統のある国際学会を行うことは並大抵のことではありません。日本支部としてもCo-President Local Organizing Committee ISW2011とLOCのmemberを決定していただき、対応していく必要があろうかと考えています。また多くの会員の方々には、ISW 2007のみならず、Australia, AdelaideにおけるISW 2009にもご出席いただいて、ISWの独特の運営を学び、かつ世界各国からの参加者と友好を深めていただく必要があろうかと考えています。こういった努力が、日本の外科医の力を世界のISS/SICの会員に認識していただく絶好の機会となり、Japan ChapterのISS/SICの中での揺るぎない地位を確立する礎になるものと確信しています。ひき続き、ご協力の程をよろしくお願い申し上げます。

第21回 万国外科学会 日本支部会議事録

日　時：2006年3月30日 木曜日　午前7時30分～8時30分
会　場：東京国際フォーラム　G602

出席者：33名

愛甲　孝、秋丸琥甫、江崎卓弘、大谷吉秀、掛川暉夫、金子弘真、亀山哲章、北川雄光、北島政樹、北野正剛、佐々木巌、篠澤洋太郎、嶋田　紘、白日高歩、杉岡　篤、鈴木則夫、砂川正勝、高橋俊雄、高見　博、土屋涼一、中尾昭公、中山壽之、林　四郎、比企能樹、広瀬宣明、松本純夫、真船健一、水本龍二、村田宣夫、山川達郎、山口幸二、山本雄造、渡辺昌彦　（五十音順、敬称略）

議　事

① 山川支部長挨拶
② 北島会長挨拶：2月7日からスイス・ダボスで行われたexecutive meetingについて報告があった。Program委員会、トレーニングコース、ダーバンの会計報告等々。
③ 会計報告　2005年決算報告および2006年予算報告　ともに承認された。
④ 庶務報告　会員数　336名（active 304名、senior 30名、名誉会員　2名）
⑤ 国際学会報告：IAES、ISDS、国際食道学会などについて報告された
⑥ その他

特別寄稿

国際学会の思い出

大阪大学大学院医学系研究科
外科学講座教授
門田　守人

私が初めて、国際学会で発表したのは大学卒業７年目の1977年のことで、カナダのLondon, Ontarioで開かれた The First International Symposium on Immunological Monitoring of the Transplant Recipient であった。この時は私にとって２回目の国際学会出席であったが、最初は更に４年前のことで、国際学会への出席というよりも、観光旅行的なものであったため、ほぼ初めての国際学会出席と言う感覚であった。しかも、なんと一人で出席して、始めて発表と言うこととなったのである。

最初に、このシンポジウムに抄録を送るときには指導教官にお願いして、同行してもらえるという約束をとってのことであった。しかし、結果的に出発直前に指導教官の都合がつかなくなり、単独の出席・発表となった。今考えてみても、無鉄砲な計画を立てたものである。まだ一度の海外留学の経験もなく、また、学生時代に英会話を特別に勉強したわけでない者が、一人だけで国際学会に出席して発表する道を選んだのだ。その時には、前もって原稿さえ準備しておけば、仮に指導者の同伴がなくてもどうにかなるであろうと、非常に安易に考えていた。しかし、出発の日が近づくにつれ、だんだんと不安が募ってきたことを今でも強く記憶している。トロントからロンドンに飛行機で入ったのであるが、その飛行機を見てまた驚いた。ジェット機ではあったものの、片側それぞれ一人と二人掛けの座席があるだけの非常に小さな飛行機で、これも私の不安を強くさせた。そのような旅行で、学会会場に入ったのであるが、レセプションの後にホテルに帰り、発表の準備をしてベッドに入ったが、とても眠れる雰囲気ではない。どうしてこんな所に一人で来てしまったのであろうかと、非常に後悔したことを昨日のことのように覚えている。幸い、私の発表は学会二日目であったので、まず、初日の雰囲気を見て対策を考えようと自分自身に言い聞かせて眠りについた。

そのような雰囲気で、学会が始まった。今回の学会のタイトルがシンポジウムとなっているように、発表はすべてシンポジウム形式で、個々の演者の発表が終わると、全員がステージに上がり、シンポジウムの形で討論を行うのである。これを見てまた一段と自信がなくなってきた。幸いなことは、そこでニューヨークから出席しておられた、日本人のA. Sakai先生とS. Tanaka先生にお会いできたことである。面識は全くなかったが、恥を忍んで、私は英会話がほとんどできないので、発表時に何か問題が生じたときには助けていただきたいとお願いしてみた。Sakai先生は早速、司会者に話してくれて、承諾を得たので安心して発表しなさいと優しい言葉をいただいたことを今でも忘れることはできない。この段階で、何とかなるであろうと初めて前向きに考えることができるようになった。

しかし、その後もっと自信のつく出来事を目撃することができた。と言うのは、一日目のあるシンポジウムで、予定通り個々の演者の発表があり、引き続きシンポジウムの形で討論が始まったのであるが、ドイツからの演者であったと思うが、司会者が何を質問しても腕組みをしたままで何も答えないのである。司会者はすぐに次のシンポジストへの質問へ移っていった。この様子を見ながら、私は自分の今までの態度を少し反省させられた。このドイツ人医師は英語で討論できないことを残念に思っているかもしれないが、その時の私のように自分を決して卑下している様子はないと言うことである。私たち日本人には、つい英語コンプレックスがいろんな所に出て来てしまう。それに引き替え、この若いドイツ人医師は違う、この態度は我々日本人にはなかなか真似ができないことである。どこが違うのであろうか。わずかな出来事であったが、考えさせられることが少なくなかった。

このような状態で、自分の発表の時がきた、私たちのセッションでは時間が十分になく、結果的には私のところまで発言の順番がこなかったのである。

この時のハプニングとして、Sakai先生のDownstate Medical Center in Brooklynの主任教授であるSamuel L. Kountz教授がアフリカを旅行した後に体調を壊し、重体であったそうだが、このシンポジウム中に死亡されたとの報告がされた。そして、この会議中に黙祷を捧げたように記憶している。正しくは意識不明がずっと続き、1981年に亡くなられたそうである。

このように、私の初めての国際学会の経験は、若いときの不安に満ち苦くもあり、また楽しくもあった遠い思い出である。しかし、今まで経験しなかった何か新しいものを教わったことは間違いない。今考えてみても、若いときの失敗をおそれないチャレンジ精神は必要で、これが若い者の特権でもあろう。

若い皆さんの国際学会への積極的な参加を期待する。

特別寄稿

国際学会と私

昭和大学附属豊洲病院　外科教授
熊谷　一秀

1974年６月、順天堂大学外科の門を叩き、厳しく、楽しくまた刺激的な外科研修生活に入った。国際学会に関しては当時、一部の研究室で熱心であったが、私の所属した胃癌の病理・内視鏡研究室では1980年代になりようやく国際学会参加への気運が高まり、英会話講習（？）も盛んになっていった。初めての国際学会参加は1980年のAuckland（New Zealand）で開催されたAsian-Pacific Congress of Gastroenterologyで、先輩の発表の付き添いという形での参加であった。カンファレンスルーム程度の小さな講義室でのホットなデイスカッションに興味を持ち、ゆったりとした日程の旅行を楽しんだ（今日では考えられない）。

1982年以降は毎年２－４題の国際学会発表の機会を得た。当時まだまだ若輩であったが国際学会では国内ではなかなか話もできない他施設の大先輩の先生方と会場ロビー、懇親会などで気さくに話ができたことも国際学会の楽しい思い出である。当時の国内学会では会場聴衆との討論はあまり熱心ではないことが多いという印象を持っていたが（現在はかなり活発）、国際学会ではまじめな議論好きな人々が多く、質問の多さに驚いた記憶がある。当時の日本人発表者の英語力も誉められたものではなかったが、大部分の参加者が母国語ではない英語で意志を伝え合う姿には逆に心強さを感じたものである。

1985年、現在の施設に移ったが、まだ大学、医局に余裕がある時代であり、医局員を誘い毎年のように国際学会に参加した。万国外科学会は1989年のToronto(Canada)での会が最初である。それ以降、1995年のLisbon(Portuguese)、1999年Vienna(Austria)、2001年Bruxelles(Belgium)と参加、発表している。私の主たる研究テーマである胃癌の臨床病理、転移、治療に関しては本邦が常に最先端を走っていると自負していたが、国際学会の発表のなかには日本における常識をbreak throughするアイデアにも出会ったし、本邦では比較的興味の薄い分野でも海外では強い関心が持たれていることも感じさせられた。現在、外国文献もInternetなどでon timeに得られる時代ではあるが、国際学会の意義は、得てして独善的に成りがちな本邦の外科医に対して広い視野を与えてくれる場とも考えている。

最近では国際学会のopening ceremony、reception, Banquetなどにも極力参加するようにしている。海外の同年輩の仲間との再会はもちろん、それぞれの国際学会開催国の特徴、国際学会自体の方向性が感じられて興味深い。初めての万国外科学会(Toronto)のopening ceremonyでは内分泌外科、外傷外科などの国際的な重要性を感じたものである。2011年には万国外科学会の本邦招致が決定されたとのこと、まことに喜ばしい限りである。外科学の一層の発展を祈念すると伴に、本邦の外科学の将来における方向性を見出せる企画になることを期待している。

特別寄稿

ISW 2007、ISW 2011の成功に向けて

鹿児島大学大学院
腫瘍制御学・消化器外科学教授
愛甲　孝

万国外科学会（ISS / SIC）には、1989年のトロントのWorld Congress以来、連続して教室員とともに出席し、発表・司会を重ねてきた。それぞれの学会において貴重な経験とともに、異国の新旧友人達との交流を含め、楽しい想い出を積み重ねている。記憶に新しいところでは、南アフリカ連邦共和国ダーバンでの第41回万国外科学会である。アフリカ全土の外科医の力強い息吹を感じた学会でもあった。学会運営そのものもProf. Siewert会長と Prof. Pilley会長（LOC会長）との絶妙な連携で、格式の高いスマートな運営がなされた。北島教授が主催される2007年のMontreal Meetingはもとより、横浜で開催される予定のISW 2011でも、日本を中心としたアジアの大きな活力を発揮すべく、成功に向けて最善を尽くすべきであることは云うまでもない。

消化器外科系の国際学会はISDSをはじめ、幾つかの臓器別、専門分野別の学会があるが、外科系全体を視野に入れた総合的な伝統ある万国外科学会の意義は極めて大きい。国際学会の意義については、運営の在り方を含めいろいろな観点から機会あるごとに種々論じられてきたが、Comprehensive Meetingの良さは横断的学術の動向を知る上で極めて有意義である。その意味では、国際的に評価の高い万国外科学会に我が国の優れた研究者を派遣し、学術研究の国際貢献・ 国際交流に資することは私どもの責務でもある。本学会の創設以来からの経緯に関しては、多くの先人が語るところであるが、「La Societe Internarionale De Chirurgie」と称し，ノーベル医学賞受賞者であるテオドール・コッヘルによって1902年に創立された世界最古の国際学会である。比企能樹・寿美子先生ご夫婦の一連の著書に、第7回学会から日本代表として活躍されておられた三宅速教授の万国外科学会にまつわる逸話が述べられている。どれをとっても興味深い読みものである。また、創立100年を記念して、初回の開催地であるブリュッセルにて行われた記念事業「Grey Turner Lecture」における、北島政樹教授の講演はとても好評であり、今も折にふれ語り継がれている。さらには、本学会の名誉会員である出月先生をはじめ比企前理事、北島会長，山川日本支部会長ら諸先輩の先生方のこれまでの多大な功績が世界に認められ、日本のリーダーシップが今後も求められていることは冒頭に述べたごとくである。

一般に横断的な学術会議は、プログラムが総花的になり、焦点がぼけてしまう傾向にあるが、本学会の運営には学ぶべきところが多い。独特のシステムで運営され，「会長が全権を持ち，開催地の組織委員会会長に学会を運営させる」という方式で、会長のお膝元では学術総会は行われない。また、会議の運営に関しては、Constitutionが明確に定められ、Executive Committeeで独自になされている。同じ領域の学術発表がParallelに行われることはなく、参加者にとってはありがたい。プログラムの構成や募集採択までISS/SICのProgram Committeeが行っており、公明正大かつ厳格に最終決定がなされる。

一方参加者にとって、このような国際学会は多くの感動を与えるものである。冒頭のダーバンでの学会において、くしくも教室の上之園君がNyphus Memorial Awardの栄誉を受けたが、若き研究者の発奮材料となったのは云うまでもない。乏しい英語の表現力に苦労しながら受賞したことは、私ども関係者にとって望外の喜びの一つであった。座長の北島先生はじめ日本人関係者のご指導に感謝したい。いずれにしても、今私ども大学関係者をはじめ研究機関で働く勤務医は実に過酷な臨床・研究の毎日を過ごしている。そのような忙しい中にあって、国際学会で緊張し発表する、多くの研究仲間に接する、そして歴史のある当地の文化にふれることが極めて大切なことであることは論を待たない。私の友人である海外の指導者の多くは本学会で知己を得たものであり、感謝にたえない。

これからの若い世代の先生方は益々国際学会に参加する機会が多くなるであろう。国際学会で多くの経験を積んで、グローバルな観点からも外科医として成長してもらいたいものである。何はともあれ、一人でも多くの外科医が万国外科学会（ISS/SIC）に参画し、Impact Factorの急上昇しつつあるWorld Journal of Surgeryを活用し、本邦から世界の医学医療へ情報を発信して頂きたいものである。

いずれにしても、日本の外科系関係者による協力のもと、ISW 2007、ISW 2011が成功するよう、一会員として微力ながら努力したい。

お知らせ事項

ISS/ SIC Genral Assembly 2005から

Wednesday, August 24, 2005/10/03
at International Convention Center

New Officers of the Executive Committee
Society and Congress President; Masaki Kitajima, Tokyo Japan
President-elect; Micheal Sarr, Rochester, USA
Past President; J. R. Siewert, Geramny, Munich, Geramny
Secretary General; Felix Harder, Basel, Switzerland
General Treasure; Kenneth Boffard, Johannesburg, South Africa
Editor-in-Chief WJS; John Hunter, Portland, USA
Councilors & Chairman Electronic Media; Emanuele Lezoche, Rome, Italy
Councilors; Jorge Cervantes, Mexico City, Mexico
Gaurav Agarwal, Lucknow, India
Attila Csendes, Santiago de Chile, Chile
IAES Representative; Henning Dralle, Helle, Germany
IATSIC Representative; Ari K. Leppaniemi Helsinki, Finland
IASMEN Representative; Kenneth C.H. Feason, Edinburgh, uk
BSI Representative; Raimund Jakezs, Vienna, Austria
Secretary-Treasurer ISS-Foundation and Permanent Guest;
Jay L. Grosfeld, Indianapolis, USA
ISS./SICCongress Vice Presidents ISW 2007（one term）
Leigh Delbrigde, Sydney, Australia(ISS/SIC)
Tatsuo Yamakawa, Kawasaki, Japan (ISS/SIC)
Paola Miccoli, Pisa, Italy ; IAES
Ronald V. Maier, Seattle, USA ; IATSIC
Polly Cheung, Hong Kong, SAR ; BSI
Peter B. Soeters, Maastricht, NL ; IASMEN
Andre Duranceau, Montreal, Canada

ISS/SIC Constitutionの変更

1. Annual Dues の増額 ; 2006~
   US$135.00＋Japan Chapter Assessment US$40.00
   ＋Integrated Society; IASMEN; US$ 22.00
2. National Delegate ; one term ; 4years with eligibility for one term only
3. Chapter ; 150人以上のactive memberが必要
4. Membership ; No Medical scientist involved in medical research related to surgery may also be accepted as members.
5. Membership application on-lineが可能となる。詳細は、ISS/SIC Homepage参照のこと
6. Active member ; National Councilorの審査後、National Delegate による承認を要する

ISS/SIC日本支部長　山川達郎記

会員動向

2006.3月以降

会員数	363名
アクティブメンバー	329名
シニアメンバー	31名
名誉会員	3名

万国外科学会 日本支部　新入会者

坂田　隆造	鹿児島大学医学部
小山　勇	埼玉医科大学
西村　和郎	大阪大学医学部
田中　淳一	昭和大学横浜市北部病院
藤元　治朗	兵庫医科大学医学部
窪田　敬一	獨協医科大学医学部
海野　倫明	東北大学医学部
笹冨　輝男	久留米大学医学部
志村　英生	福岡大学医学部
掛地　吉弘	九州大学医学部
山上　裕機	和歌山医科大学
大竹　徹	福島県立医科大学医学部
竹之下誠一	福島県立医科大学医学部
天神　敏博	日本医科大学医学部
土岐　彰	昭和大学医学部
福島　亮治	帝京大学医学部
高野　邦夫	山梨大学医学部
城谷　典保	東京女子医科大学
後藤　満一	福島県立医科大学医学部
吉澤　康男	昭和大学藤ヶ丘病院
真田　裕	昭和大学藤ヶ丘病院
浜　善久	信州大学医学部
浜田　節雄	埼玉よりい病院

訂正とお詫び

2005.11.9発行第21号にて新入会者として掲載した中で近藤　匡先生、寺本研一先生、佛坂正幸先生以上3名の方々につきましては、書類上の不備から再申請を予定しております。
訂正いたしますとともに、謹んでお詫び申し上げます。

事務局より

万国外科学会ニュースにはこれまで多くの先生方に御寄稿をしていただきました。お忙しいなか有意義なお話し、ご提言などをいただき、改めまして感謝申し上げます。前回の第22号までに特別寄稿していただいた先生方のお名前を掲載します。各先生方のさまざまな体験、貴重なご意見を伺うことができました。

バックナンバーをご希望の方にはお送りいたします。事務局までご連絡ください。

（順不同、敬称略）

第3号	曽我　淳、北野正剛
第4号	藤本吉秀、馬場正三、田中雅夫
第5号	石川浩一、高見　博
第6号	小西敏郎、阿部令彦、神前五郎
第7号	土屋涼一、石川正昭、磨伊正義
第8号	林　四郎、白日高歩、鍋谷欽一
第9号	原口義座、白鳥常男、秋丸琥甫、平山廉三
第10号	佐竹克介、北村正次、真船健一
第11号	今村正之
第12号	松本純夫、岩間毅夫
第13号	砂川正勝、鈴木　力、井上一知
第14号	今田敏夫、野口志郎
第15号	関川敬義、橋爪　誠
第16号	大谷吉秀
第17号	西田俊朗、草野満夫、加納宣康
第18号	嶋田　紘
第19号	冲永功太、千々岩一男
第20号	宇山一朗、清水一雄、阿部令彦
第21号	村上三郎、山内英生、上西紀夫
第22号	中尾昭公、佐々木厳

ISS/SIC 会員募集

ISW参加に際して、会員には大きな特典が与えられています。今がISS/SICに入会していただく絶好のチャンスです。若い先生方の入会をご推薦下さい。